

イスラーム・ジェンダー学科研 2022 年度

イベント名：<記念セミナー>マイノリティとして生きる

——アメリカのムスリムとアイデンティティ

日 時：2022 年 12 月 4 日（日）13:00～15:00

会 場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室およびオンライン

司 会：後藤絵美（東京外国語大学 AA 研）

登壇者：リック・ロカモラ（記録写真家）、高橋圭（東洋大学）、長沢栄治（東京外国語大学 AA 研）

* * * * *

後藤：本日は、記念セミナー「マイノリティとして生きる——アメリカのムスリムとアイデンティティ」にご参加くださいまして、誠にありがとうございます。司会進行を務めます、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（通称 AA 研）の後藤絵美と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

今日のセミナーは、AA 研と科研費基盤研究（A）イスラーム・ジェンダー学と現代的課題に関する応用的・実践的研究の共催によるもので、東京外国語大学出版会からの写真集の刊行と、現在 1 階で開かれている写真展の開催を記念するものです。写真集と写真展では、アメリカのカリフォルニア州オーバーグランドを拠点として活動中の記録写真家のリック・ロカモラ氏の作品を紹介するとともに、それらの作品を通して現代世界が抱える問題——人びとのあいだの分断や対立——の解決方法を模索することを目的としています。展示をご覧いただき、本を読んでいただくことで、そのメッセージが伝わるようにと工夫してきましたが、それでも伝えきれないものがあります。本日は米国から駆けつけてくださったリック・ロカモラさんを含めて、3 名のご登壇者のお話を通して、それをお伝えできればと願っております。

それでは、さっそく会を始めたいと思います。最初の登壇者は高橋圭さんです。高橋さんはエジプトを中心に近現代社会のスーフィズムをご研究されていて、2016 年以降、アメリカをフィールドに加えられました。今回の企画は高橋さんのご提案で、約 4 年の歳月の末に実現しました。今日はロカモラさんとの出会いと、アメリカのムスリムについて、お話しいただきたいと思います。では高橋さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

高橋：皆さん、こんにちは。今日はご参加くださいまして、ありがとうございます。リックさんについてのお話に入る前に、まず私自身がどのような研究を行っているのか、そして、どのような経緯で本が出来上がっていったのかについて、簡単にご説明したいと思います。

私は近現代のイスラーム、特にスーフィズムと呼ばれる信仰伝統に焦点を当てて研究をしています。もともと近代エジプトのスーフィズムの研究から出発したのですが、最近はアメリカにおけるスーフィズムの展開に視野を広げて研究を進めています。ちなみに一緒に編集を行った後藤さんとは、2000 年代初頭に、エジプトに留学して調査をしているときに初めてお会いして、その後もイスラーム・ジェンダー学科研などの共同研究に誘っていただいており、今回の本もそうした共同研究の中で実現したものです。

その点で、後藤さんがいなければ、この本がこのような形で出ることはなかったと確信しています。というわけで、まずは後藤さんにここで改めてお礼を申し上げたいと思います。

さて、アメリカについては、2016年から1年半、バークレーを拠点に、サンフランシスコとその近郊の地域（ベイエリアと呼びます）のムスリム・コミュニティでフィールドワークを行いました。現在に至るまで、ベイエリアのムスリム・コミュニティが私の主なフィールドなのですが、ロカモラさんの写真も多くはそこに暮らすムスリムが対象であり、私が彼に初めて会ったのもフィールドワークの現場でした。

ロカモラさんと初めて出会ったときのことはよく覚えています。たしか2016年12月だったので今からちょうど6年前のことでした。オークランドのライトハウス・モスクというところで金曜礼拝に参加していたのですが、礼拝の様子を撮影している人がいて、それがロカモラさんでした。礼拝の後で、ロカモラさんと話す機会があり、スマホで写真を見せてもらい、また写真が掲載されている彼のホームページも教えてもらったというのが、最初の出会いです。ちなみに、その時に撮影された写真には私が写っているものもあります。私にとっては記念すべき一枚です。

帰宅してからさっそくホームページの写真を見て、とても感銘を受けました。一言で言えば、それらの写真はまさに私がこれまで見て、話し、経験してきたベイエリアのムスリム・コミュニティの姿そのものだったのです。ライトハウス・モスクを始めとして、私も何度も足を運んだ場所や、そこで話したことのある知り合いや友人の姿も多く写っていました。

アメリカの、そして特にベイエリアのムスリム・コミュニティを調査する中で、私が常に驚きとともに感じていたのは、とにかく多様な人びとがいるということでした。その多様性は、民族や出身地だけではなく、ものの考え方や、好み、そして人生経験やライフスタイルなどあらゆる側面にわたっているもので、それまでの私の理解を根本から覆すものでした。私自身はこれまでエジプトを対象地域として、それなりの期間、研究してきて、イスラームやムスリムについてもある程度知っているというふうに考えていました。ところが、アメリカでの調査を通じて、そうした理解が極めて一面的なものであり、ある種「ムスリムはこうである」といった思い込みに基づいていたことを強く認識した次第です。

もちろん、こうした多様性はすでにこれまでの研究や調査報告などでも情報としては提示してきたもので、私も現在論文などでそうした多様性を伝えようと頑張ってはいます。今回の写真集の中でも、統計データなども使いながら、その点を解説する文章も寄せております。また、後藤さんが寄せられた文章でも、ムスリムと信仰との関係について重要な示唆がなされているので、ぜひ読んでいただければと思います。ただ、そうは言っても、文章だけでは他の人に実感を持って理解してもらうのはなかなか難しいと感じています。その中で、ロカモラさんの写真は、まさにこれを生き生きと描き出すもので、キャプションと合わせて見ていただくことで、いわば私がベイエリアで何を経験したのかが伝わるのではないかと期待しております。

もう一つ、私がロカモラさんの写真について注目しているのが、そこにはムスリムだけでなく、ムスリ

ムと関わる非ムスリムの姿も収められている点です。非ムスリムがムスリムの写真を撮る、という営みは、ともすると、ムスリムを「見られる人びと」という形で一枚岩的に描く一方で、非ムスリムを見る側として透明化してしまい、写真を見る人びとと見られるアメリカのムスリムとを、何か別の世界に生きる人びととして、分けて認識させてしまう危険性があります。

しかし実際には、ムスリム・コミュニティにはいろんな人びとが関わっていて、その中にはいわゆるイスラームの信仰を共有していない人びとも多く含まれているのです。私はこうした壁をできるだけ取り除きたいという思いから、写真を選定する際には、ムスリムでない人が写っていたり、ムスリムと交流している様子を写したりしたものも敢えて選びました。それを代表するのが、私自身が写っている写真です。私は基本的には調査という形で、いわば観察者としてムスリム・コミュニティに出入りしていたわけですが、その際には、単に外側から「観察する」というだけではなく、同時に少なくともその間はコミュニティの一種の一員として、その活動に参加し、共感し、またそこで起きる問題に心を痛めたり、悩んだりもしてきたのです。そして、他にもそういう人びとがムスリム・コミュニティに関わっていたのですが、その様子を収めた写真も含まれている点が、この写真集に私が込めた重要な視点の一つです。

さて、ロカモラさんとの話に戻ります。最初に会ったときは、少し話をして終わったのですが、その後も私が調査を続ける中で、いろいろな場所で会うことになります。そしていつだったかは忘れましたが、ロカモラさんとゆっくり話をする機会もできました。彼の写真はすでにホームページでは公開されていましたが、やはりもっとしっかりした形で公開してほしいという思いが強くあり、そのときにロカモラさんと写真集の出版に関する話をした覚えがあります。ロカモラさん自身はすでにこれまで何冊も写真集を出版されてきた実績もあるので、今回のプロジェクトもそのうちに本になるだろうと考え、さしあたりご本人にお任せしていました。ただ、素晴らしい写真なので、日本でも写真展は開きたいと考えていました。

しかし、恐らく私が一人で盛り上がっているだけでしたら、これも実現しなかったと思います。帰国後、長沢先生や後藤さんをはじめとするイスラーム・ジェンダー学科研のメンバーにお話をしたところ、興味を持ってくださいました。その全面的な支援のもとで、まずは2018年に東京大学東洋文化研究所で、今回の写真集にも寄稿いただいた佐藤兼永さんの撮られた日本のムスリムの写真と、ロカモラさんの写真の両方を展示するという企画で、写真展が実現することになりました。

その後、一昨年頃からはそろそろ写真集という形で出版したいと考えるようになりました。ただし問題は資金にあり、当初はさしあたりプロジェクトの刊行物が現実的な形であると考えていました。しかし、東京外国语大学出版会にご相談をしたところ、当時の編集長であった岩崎稔先生の強い力添えもあり、きちんとした写真集として出版する運びとなった次第です。思いがけず私自身がロカモラさんの写真の出版に携わる結果となりましたが、これは本当に光栄なことであると感じています。また、出来上がった写真集は、当初私が想定していたよりも、何倍も素晴らしい仕上がりになりました。そしてこれは出版会の大内さんのお力によるところが大きかったと思います。原稿が遅くなったりしてご迷惑をおかけしましたが、改めて大内さんにお礼を申し上げます。

アメリカのムスリムを研究テーマとする私がロカモラさんの写真に興味を持つのは当然と言えば当然ですが、こうした出版までの経緯を見ると、彼の写真にはそれだけではなく、より多様な関心を持つ人びとを惹きつける強いメッセージがあるのだと改めて実感しております。2018年の写真展を佐藤さんの写真とのコラボレーションで実現できたことや、今回の写真集にもご寄稿いただいたことは、特定の国を越えた意義があるということを示していると思います。そして、本のメインタイトルを「アメリカのムスリム」ではなく「マイノリティ」としているところにも、こうした写真の普遍的なメッセージが反映されています。ちなみにこのタイトルは後藤さんのアイデアです。いずれにせよ、この写真集は多く方々のお力で出来上がったものであり、その点もこの写真集が持つ意義であると考えています。どうもありがとうございました。

後藤：高橋さん、ありがとうございました。出来上がった写真集が当初の想定を遥かに超えたものであつたというのはその通りで、皆さまのご協力とご支援のおかげだと私もとても感謝しています。また、読者の皆さまにも、これからどんどんコメントやアイデアをいただき、さらに本の内容をよく伝えられるようにならうにしたいと思っております。

それでは、次にリック・ロカモラさんにご登壇いただきます。リックさんはご自身もフィリピン系の移民で、アメリカ国内で移民の方々の写真を撮り続けてきました。長年のテーマは、移民の公民権で、不平等や人権問題についての活動も行っておられます。それではリックさん、よろしくお願いします。

※以下、ロカモラ氏の発言は通訳者による日本語をもとにしたものです。

ロカモラ氏：皆さん、こんにちは。アッサラーム・アライクム。リック・ロカモラと申します。本日はお話をさせていただけたこと、大変光栄です。私は記録写真家としてさまざまな国を訪れていましたが、各地でのあだ名があります。日本では私のことを「デブ」と呼んでください。中国や南アメリカでも同じような意味の単語を使っているのですが、私はご覧の通り怡幅がよく、そんな自分の体を恥じてはいませんので、自分自身を「デブ」と呼んでいます。この後サイン会がありますが、そのときはぜひ「こんにちは、デブさん」と気軽に声をかけてください。

さて、先週の金曜日のこと、泊まっていたホテルでパリからいらしたご夫婦と話をする機会がありました。なぜ東京に来たのかと尋ねられたので、私のプロジェクト——9.11から、トランプが米国大統領に就任した後まで続けてきた、ムスリムの人々を撮るというプロジェクト——に関してお話ししました。

そのご夫婦に、私はフィリピン出身で、アメリカで50年間暮らしていると伝えました。すると「フィリピン出身のムスリムなのですか」と尋ねられました。それに対しては「私自身はカトリックとして育ちました。私が今行っていることをするために、ムスリムである必要はありません」と答えました。このプロジェクトを進めていく中で、イマームや他のムスリムの方々から、イスラームの信仰告白シャハーダを唱えるようにと求められることはあります。これは他の宗教における「洗礼」のようなものだと言ってもさほど遠くはありません。ただ、私がこのプロジェクトを行ってきたのは（宗教や信仰上の理由からではなく）、人権や自由権に関する懸念を抱いているからです。

私が以前行っていた人権および自由権にまつわるプロジェクトは、日系アメリカ人に関するものでした。これは「いよいよそのときだ (It is about time)」というドキュメンタリーのプロジェクトで、第二次世界大戦中に日系アメリカ人が強制収容された出来事について扱っています。かれらはアメリカで生まれ、正当な米国市民であったにもかかわらず、日本人の系譜を持つからという理由だけで、そのように遭ったのです。また、アメリカ自由人権協会における権利章典や周年記念に際しても、プロジェクトを行いました。そこでは米国政府機関や組織によって自由を侵害してきた人びとの姿を写真に収めました。

私が 18 年かけて取り組んだのが、アメリカ政府からの恩給を待つ、第二次世界大戦のフィリピン人退役軍人の生活を記録するという作業です。第二次世界大戦のフィリピン人退役軍人は、戦時中にアメリカを支えた「国民」とは異なる扱いを受けました。当時、もちろんフィリピン人も傷つき、命を落とし、そしてその武勇のためにアメリカ人と同等の勲章を受けましたが、他の退役軍人と比較して、退役軍人給付金の恩給を 50% しか受けることができなかったのです。すなわち、米国の退役軍人が 1 ドルに対して、フィリピン人退役軍人は 50 セント、その半分しか受け取ることができませんでした。フィリピン人退役軍人も同様に戦争の中で傷つき、腕を失い、そういった傷を負ったにもかかわらず、そのような扱いを受けたのです。1946 年の無効法に、この不当な条項が記載されていましたが、これは米国の法律として残り続けており、今もまだ取り消されていません。

退役軍人に関しては、一橋大学の中野聰学長ともお仕事をしたことがあります。中野学長が第二次世界大戦時における日米関係に関して、フィリピン人退役軍人についての研究を行っていたときのことでした。

また、9.11 の悲劇的な事件の後に世界は大きな衝撃を受け、イスラームとムスリムをよりよく理解しようとする試みがさまざまな場所で見られるようになりました。アメリカにおいても、事件の直後、(イスラーム教の啓典)『クルアーン』(の翻訳)が売り切れてしまったという状態がありました。それは多くの人びとが、『クルアーン』を読むことでイスラームやムスリムをよりよく理解しようとしたからだと思います。

カリフォルニア州オークランドにテレグラフ・アベニューという通りがあるのですが、あるとき、そこで車を走らせながらラジオを聴いていました。ラジオから聞こえてきたのが、Amatullah Almarawahni というサンフランシスコ在住の改宗者の方のスピーチです。彼はムスリムのアメリカ人でしたが、その言葉に心を打たれた私は、車を止めて彼のスピーチに耳を傾けました。それを聞いた後、私は近くのモスクを訪れました。そこで、「私は記録写真家です」と自己紹介をした後に、アメリカにおけるムスリムとイスラームの、よりよい理解をもたらすために、ぜひムスリムのコミュニティを撮影させてくださいと願い出たのです。

私が目指したのは、アメリカ人ムスリムの顔を写し出し、そして、他の人びとと同様にムスリムも法を

守る市民であり、自分たちの家族と共同体のために生計を立てているのだと示すことでした。

それから、私は金曜礼拝の時間にベイエリアのモスクを訪れるようになり、そこでの行事に参加し、イスラーム学校や家庭、職場を訪れて、ムスリムの人びとの生活を記録してきました。9.11 後、アメリカのムスリム・コミュニティは差別や犯罪者扱い、破壊行為や嫌がらせに晒されています。

また、有色人種の人びとが肌の色や髪を理由に、あるいはシク教徒のように頭を布で覆っているという理由で、暴行を受け、差別を受け、そして犯罪者としてプロファイリングされることもありました。そこで私は丸一年ほどの期間をかけて人びとの生活を記録し、アメリカ人ムスリムとイスラームについて教え伝えようと考えました。

サンフランシスコ・クロニクル (San Francisco Chronicle) という地方新聞があるのですけれども、その日曜版で、ドキュメンタリーのために集めた私の写真と話を4ページにわたって掲載してくれたことがあります。また、市役所、大学、その他の場所においても展示を行い、私がターゲットとした受け手の人びとに届けようと思いました。

現在でも継続して写真撮影を行っています。一度は、5万ドルを出すから書籍を出版しないかと打診を受けたことがあります。ただ、そのお金を出してくれる依頼者の友人を本に載せてほしいと頼まれましたので丁重にお断りをしました。(私が) 写真を世に出すのは、その写真に写った人びとを見てほしいからで、それを本にまとめるということ自体は構わないのですが、誰かの広告として私の写真を使われたくないと思ったのです。だから、お断りしました。

反ムスリムのヒステリーは、ドナルド・特朗普が米国大統領に出馬した際に大きな話題となりました。特朗普は反移民、反ムスリムのレトリックを用いて、自分の支持者であるレイシストや宗教原理主義者、教育を十分に受けていない白人の投票者を動かそうとしたのです。特朗普が第45代米国大統領として選ばれた後に、多くのアメリカ生まれの若いムスリムが特朗普のレトリックに対抗しました。大学や空港などで集まって抗議活動を行い、ムスリムに対する明白な差別、犯罪者扱い、破壊行為に対して怒りの声を表明していました。

私自身も、カリフォルニアのアメリカ人ムスリム・コミュニティの記録することに着手しました。アメリカ人ムスリムが法を遵守する市民であり、勤勉なコミュニティであり、自分たちの家族と共同体がよりよく生活できるように誠実に暮らしている人びとのだ、と示すことができるような視覚的なストーリーを探して、州のあちらこちらを訪れました。

アメリカ人ムスリムは米国国民全体の平均よりも高い所得を得ており、テクノロジーやバイオテクノロジー、学術、医療などの業界で働いています。起業家もいます。多くの方々はアメリカで生まれ、大学を卒業してキャリアを追求し、そしてトップ500に入るような企業で努力されている人びとです。あるときカリフォルニア州にある街を訪れた際には、そこで医師として働いている人々のほとんどがイラン

出身のムスリムの方でした。

ただ、移民と有色人種が高い教育を受け、政府や企業で重要な地位に就いていることを、レイシストや宗教原理主義者、教育を十分に受けていない白人の人びとは脅威として捉え、自分たちのレトリックに固辞し、次の選挙で出馬すると表明したトランプを再び支持するのです。

写真集の中に収めているいくつかの写真の中には、日本とつながりのある方々が実は数多くいます。その例の一人が A さんという女性の方なのですが、かつて日本にいらして、多くの多様な方々と関わったことがあるとのことでした。その中でイスラームに改宗して、一度マレーシアを訪れて、テコンドーを習ったりしていたそうですが、結婚した後は、子供とともに語学学校で働いていると聞いています。

彼女の母親がキリスト教会に勤めており、父親もクリスチャン・スクールに勤めているということで、クリスマスは一体どうするのだと聞いたことがあります。彼女は、何の問題もない、ヒジャーブを着けたまま、家族と集まって祝うだけだと言っていました。それからもう一人、書籍の中で B さんという方がいるのですが、この方もかつて東京で英語教師をされていたという話でした。7 年前のことになりますが、イランの方と結婚をして、ベイエリアに移り住んだそうです。現地の方々とお話しをする際、今回日本で出版された本や展示会のことについても話題になっています。

ここで私が申し上げたいのは、私の写真に写っている人びとと日本とのあいだにも、非常に多くのつながりがあるということです。私の写真と写真集がこの日本で出版されたこと、また、写真展がここで行われていることは、大変素晴らしいと思っています。世界のあらゆる場所で、ムスリムの人びとの数が増えていますし、そういった中で私がこのような機会を持てたのは大変光栄なことです。

この場をお借りして、東京外国語大学出版会の大内様、後藤絵美様、高橋圭様、そして長沢栄治先生に心からの感謝を申し上げます。アメリカ人ムスリムについての私の作品を書籍としてまとめる機会をくださいまして、ありがとうございました。本の形にすることが極めて重要だと思っています。なぜかと言うと、ウェブサイトや他のメディアに掲載されるよりも、書籍という形でまとめられた方が、寿命が長くなるからです。とくに書籍となることによって、数世代先の日本人やフィリピン人、あるいは多くの若い人びとが振り返って、二十年前、五十年前のアメリカで、ムスリムの人びとに対して差別があったのだということを知ることもあるでしょう。このような形で多くの人びとに対して、アメリカ人ムスリムとイスラームについて伝える機会を与えていただけたことに関しまして、心よりの感謝を申し上げます。ありがとうございました。Domo Arigato.

後藤：リックさん、ありがとうございました。

最後のご登壇者はイスラーム・ジェンダー学科研代表の長沢栄治先生です。ご専門は中東地域研究・近代エジプト社会経済史で、2016 年以来、イスラーム・ジェンダー学と呼ばれる分野を立ち上げるプロジェクトを率いてこられました。長沢先生の緩やかな差配の上で、比較的若い研究者たちが、自由な発想

で、またそれまで日本ではほとんど手付かずだった「イスラームとジェンダー」に関するテーマを、幅広く研究できる体制が整いつつあります。それでは長沢先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

長沢：ご紹介ありがとうございました。皆さん、こんにちは。今日はご参加いただき、ありがとうございます。

まず、写真集の出版についてお祝いを申し上げます。そして何よりもリック・ロカモラさん、企画・編集にあたっていただいた後藤さんと高橋さん、エッセイを寄稿していただいた以前にも写真展でコラボレーションしていただいた佐藤兼永さん、そして東京外国語大学出版会の大内様、その他の多くの方々に感謝したいと思います。

私はロカモラさんのお話に対する短いコメントをするという形で、お話をさせていただきます。皆さんもお聞きになられたように、この素晴らしい写真集が、リックさんご自身の多くの人びととの出会いの経験の中から生み出されたということを私も知りました。彼がこれまでに出会った多くの人びととは、日系アメリカ人の人びと、フィリピン退役軍人の人びと、または政府機関によって市民的自由を侵害されてきた人びと、そして彼が説教に感銘を受けたイマームをはじめとするアメリカのムスリムの人びとです。そうした数多くの人との出会いの中には、今日冒頭でお話いただいた高橋さんも含まれているかと思います。

そこで、人びととの出会いの意味とは何かということを考えてみたいと思います。多くの人と出会うことで得るもの、あるいは出会いが生み出すものとは一体何かということです。得ることのできるもの一つは、相手が抱えている歴史、その生き方に反映された歴史を、出会いの中から知ることができるということです。その中に自分自身もつながり、関わりを持っている歴史がある。例えば戦争の歴史があります。第二次世界戦争という過去の歴史もありますし、これらの過去の戦争の歴史が、現在の私たちの生き方を大きく拘束していることがあります。また、現在の戦争——中東地域を中心に見ると、対テロ戦争というものがありますが——とそれによる人権抑圧の状況は私たちとけっして無関係ではない。こうしたことでも、具体的な人びととの出会いの中から知るということが重要なのではないかと考えます。

リックさんの素晴らしい写真の多くは、けっして衝撃的な事件を伝えるような生々しい報道写真ではないわけです。人びとの日常の生活や生き方に温かい眼差しで迫った作品ではないかと考えます。それはリックさんの人柄を反映していて、けっして気負ったところがなく、リラックスした雰囲気に包まれた写真ではないかと思います。ただし、こうしたリックさんの温かい眼差しの背後には、静かな怒りがあることが分かります。それは何に対する怒りかといいますと、人権や自由を侵そうという勢力に対する怒りです。

先ほど「出会い」ということを申し上げましたが、素晴らしい写真の中で私たちはいろいろな人と出会うことができるわけです。直接の出会いでなくとも、しかし、そこで得られるものは一体何だろうかと。もちろん、生身の人間との出会いに勝るものはないとも言えますが、写真の中で人びとと出会うという

ことはどういう意味を持つのでしょうか。

ここで少しずれますが、私自身の、特に調査地での人との出会いについてお話をしたいと思います。思い出すのは、あるエジプト人の友人とスーダン人の友人から——これは別々の場所と時のことなのですが——名刺代わりに自分のポートレート写真を渡されたことです。このお二人はそれぞれ一期一会というような出会いをした人でした。このように名刺代わりに写真を渡すというのは一般的な習慣かどうかは分かりませんし、こうした習慣がいつ頃からエジプトやスーダンで始まったのかは分からないます。そのお二人とはその後会う機会もないままですが、いただいた写真は今も自分の胸の中に、非常に深く刺さっているのです。

こうした思い出からも、やはりそこには写真が持つ強い力があるのではないかと思うわけです。写真に関する専門的な議論はすでに多くなされているかとは思いますが、やはりリックさんの写真集を見て、写真の中の人びとの出会いから私たちが学ぶものは非常に多いのではないかと考えたところです。

この写真集の「あとがき」を書いたのですが、このプロジェクト自体がイスラーム・ジェンダー学科研の一環としてなされていますから、プロジェクトの研究目的に関連して、マイノリティをめぐる議論をその中で書いております。しかし、こうした私の小難しい議論では分からないことが、一枚の写真から——マイノリティとして生きる人びとの姿と出会いことによって——知ることができます。ぜひ楽しんで写真集を見て、いろいろなことを学んでいただきたいと思います。ありがとうございました。

後藤：長沢先生、ありがとうございました。今日のこの場も、人との出会いの場であり、また、写真を通しての人との出会い、あるいは Zoom の画面を通しての人との出会いも、私たちに意味をもたらすのだろうと思いながら、お話を伺っておりました。

ご講演は以上となります。どうもありがとうございました。